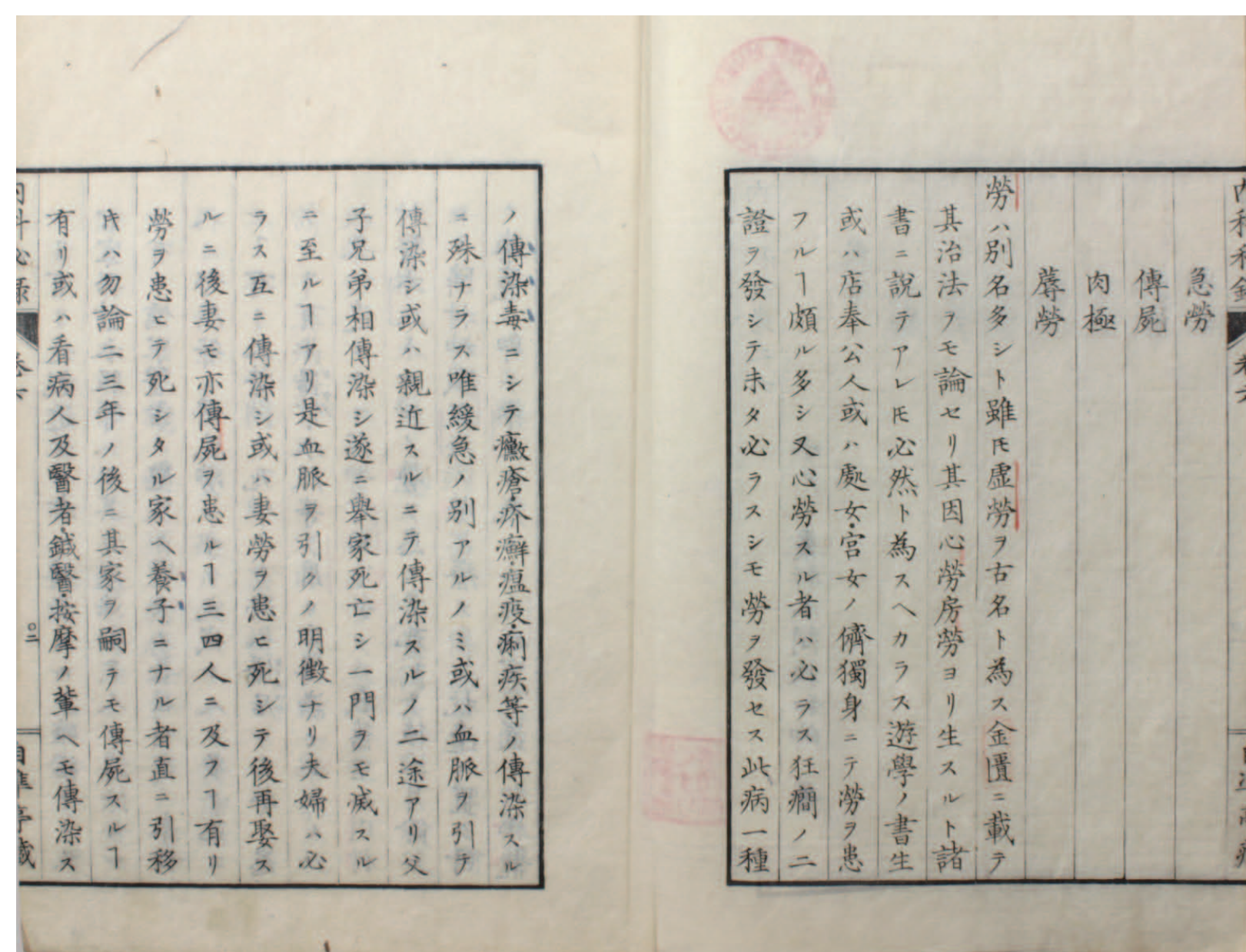


労咳 伝染し、死に至る病

「**労咳 (ろうがい)**」は現在の**肺結核**で、結核菌が体に侵入して起こる慢性の感染症です。労瘵 (ろうさい)、瘵癩 (るいれき)とも呼ばれました。江戸時代には、疲れやすい症状を重要視せずに治療をしなかったため、周囲への感染が進み、大勢の人々が亡くなりました。明治時代には工場や軍隊で、不衛生な環境での集団生活により大流行しました。



本間棗軒は『内科秘録』の中で、発熱や咳、吐血などの症状を詳しく記している。
【元治元年 (1864)】